

朝をひらく

御廟の高台は、東涯を四季に彩られる八ヶ山、西涯を四千余の墳墓が鎮座する霊地が支える。ときおりの風が五百余基の石灯笼のあいだを吹き抜け、石垣を駆け上って杉の木々をゆらす。

昭和30年代のこと。沈みかける夕日が西空を染め、あかね雲が幻想的に天をおおう中、その旅僧は寺の坂路をほうようにして上ってきた。

旅僧は寺の本堂に入るなり、須弥壇の前にすわって経を唱え始める。「あ、ノザキさんだ」、母は難儀な表情を浮かべて住職に伝えた。

住職と旅の僧

永田 円了
真国寺住職



およそ60年も昔のことを、なぜこんなにも鮮明に覚えているのだろうか。私の記憶の中に、痛いほどの鮮やかさをもって、その時の情景が映し出される。お経が半時間ほども続いたろうか。ノザキさんは、居間の火鉢にひじをのせ父と向き合っていた。私は六畳間の隅っこで2人の様子を興味深く見ている。10歳の少年の目にもノザキさんは、なんとも風変わりだった。継ぎはぎの黒衣を肩までたくし

あげ、白衣の袖は垢が光り、円頂に剃刀があたったのは何カ月も前のようで、僧といっても、ありようは乞食のようだった。たばこを一服ふかし、火鉢の灰をいじりながら無言の父。年頃は父とはあまり変わらない旅僧。頬が異様に赤く健康そうで身体は丸く、人懐っこい眼は、その奥に広がる広大な内界を物語るに十分な輝きを放っていた。そばにずた袋が見える。大根の葉がはみ出している。諸国行脚の托鉢でもらったものだろう。火鉢に目を向けたままの、2人の長い沈黙は、決して不自然なものではなかった。時折顔を上げる父の目には、羨望にも似た色があった。そこにいる2人は紛れもなく、一カ寺の住職と

生き方巡り 沈黙の対話

旅僧。にもかかわらず、精神世界の大きさは逆転していた。いま60年の歳月を経て、2人の沈黙の対話を読み解くことができる。「人のいのちは、劫億の彼方より生まれ、億万劫の彼方へ去る。風も同様、いずかたより来て、ただ頬をなでてゆく時だけ人は風とみる。しかし誰も風を見た者はいない」。人のいのちも風のごとく虚仮。ただそこに在るのは、人の生涯の行動のみ。「人の生き方というのはいくつ。己のたてた生き方が当人にとって美しければそれでよい。それぞれのいのちを思うがままに生きるのだ」。無言の会話はこのようなものだったのだろうか。翌朝、自分でつくった粥をうまそうに食べ終えたノザキさんは、いかにも世外の天を歩む旅僧のごとく、寛々とした足取りで寺の坂路を下って行った。